

東日本大震災における乳幼児・児童のストレスとその対応 2

—保育者が捉えた震災 11 か月後の子どもと保護者の姿—

本郷 一夫¹・加藤 道代¹・神谷 哲司¹・平川 久美子¹・進藤 将敏¹・飯島 典子²

（東北大学 大学院教育学研究科¹）

（聖和学園短期大学²）

【問題と目的】 2011年3月11日に発生した東日本大震災後、私たちは乳幼児・児童への支援を行うために、子どもを取り巻く重要な人的環境である保育者・教師に対する支援を行ってきた。研究1では2011年5月に行った保育者を対象としたアンケート調査の結果に基づき、震災直後と震災2か月後の保育所と子どもの様子について報告した。研究2では2012年2月に行った講演とグループワークの際に実施した保育者を対象としたアンケート調査の結果に基づき、震災11か月後の子どもと保護者の姿を報告するとともに、震災が子どもに与えた影響について考察する。

【方法】 1. 対象： 仙台市内の保育所46か所の保育士46名。 2. 調査日： 2012年2月下旬。 3. 手続き： 2012年2月21日に実施した「東日本震災後の子どもの理解と支援」の研修会に際して、アンケートを実施した。アンケートは事前にあるいは研修会の当日に持参してもらった。

4. 調査内容： ①「子どもの保育全般について困っていること・気になっていること」、②「保護者対応について困っていること・気になっていること」について尋ねた。

【結果と考察】 1. 子どもの保育全般について困っていること・気になっていること：

図1に示されるように、震災11か月後においても、依然として＜不安・怯え＞（12例）、＜音への過敏性＞（12例）、＜地震ごっこ・津波ごっこ＞（11例）が多く報告された。このうち地震ごっこ・津波ごっこについては、年末・年始に多く放映されたテレビ映像の影響があると考えられる。また、＜その他＞（13例）の例としては、「チックがみられる子どもの症状が避難訓練時になると特にひどくなった」、「子どもたち（5歳児クラス）の落ち着きがない」、「住居が流され今までより狭い環境で暮らす中、“静かに”と言われることが増えているようで、保育所での声や動きが大きくなった子もいる」、「原発問題を心配して家庭から弁当を持参して食べている子どもの食欲が落ち、残食が目立つ」などが挙げられていた。

2. 保護者対応について困っていること・気になっていること：

主な報告として＜放射能に関する保育所の対応＞（10例）、＜保護者自身の問題＞（9例）、＜震災による転入児の保護者対応＞（6例）が挙げられていた。特に＜保護者自身の問題＞については、「震災を機に祖父母と同居」「父親の仕事の都合で家族がばらばらに暮らすことによる環境の変化」「転職や休職中」などによって「保護者が落ち着かない状況にある」ことが指摘されていた。加えて、「震災後、恐怖から心を病んで仕事に出られなくなった保護者がいる」ことも報告された。また、＜震災による転入児の保護者対応＞の例としては、「福島から避難してきた子どもの母親が初めての場所で不安な様子が見られる」「被災地から転居し、夫が忙しいため子育てを一人で抱えている母親がおり、急に気持ちが沈んだり、子どもの身なりにあまりかまわないことが気になっている」などが報告された。

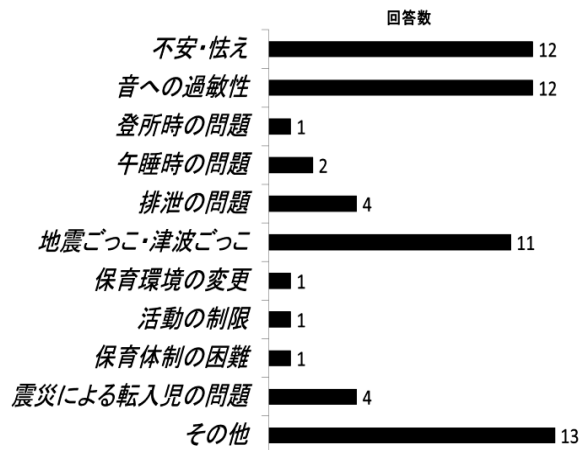


図1 震災11か月後の子どもの保育全般

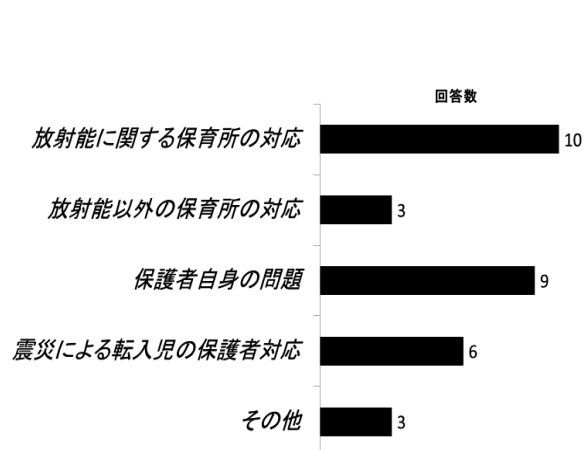


図2 震災11か月後の保護者対応